

令和4年度

第2回学校運営協議会

第2回 学校関係者評価委員会資料

学校評価 教員中間アンケートの結果より

期間:9月28日(水)～9月30日(金)

対象:教員 22名

形式:質問紙調査による調査(4件法)

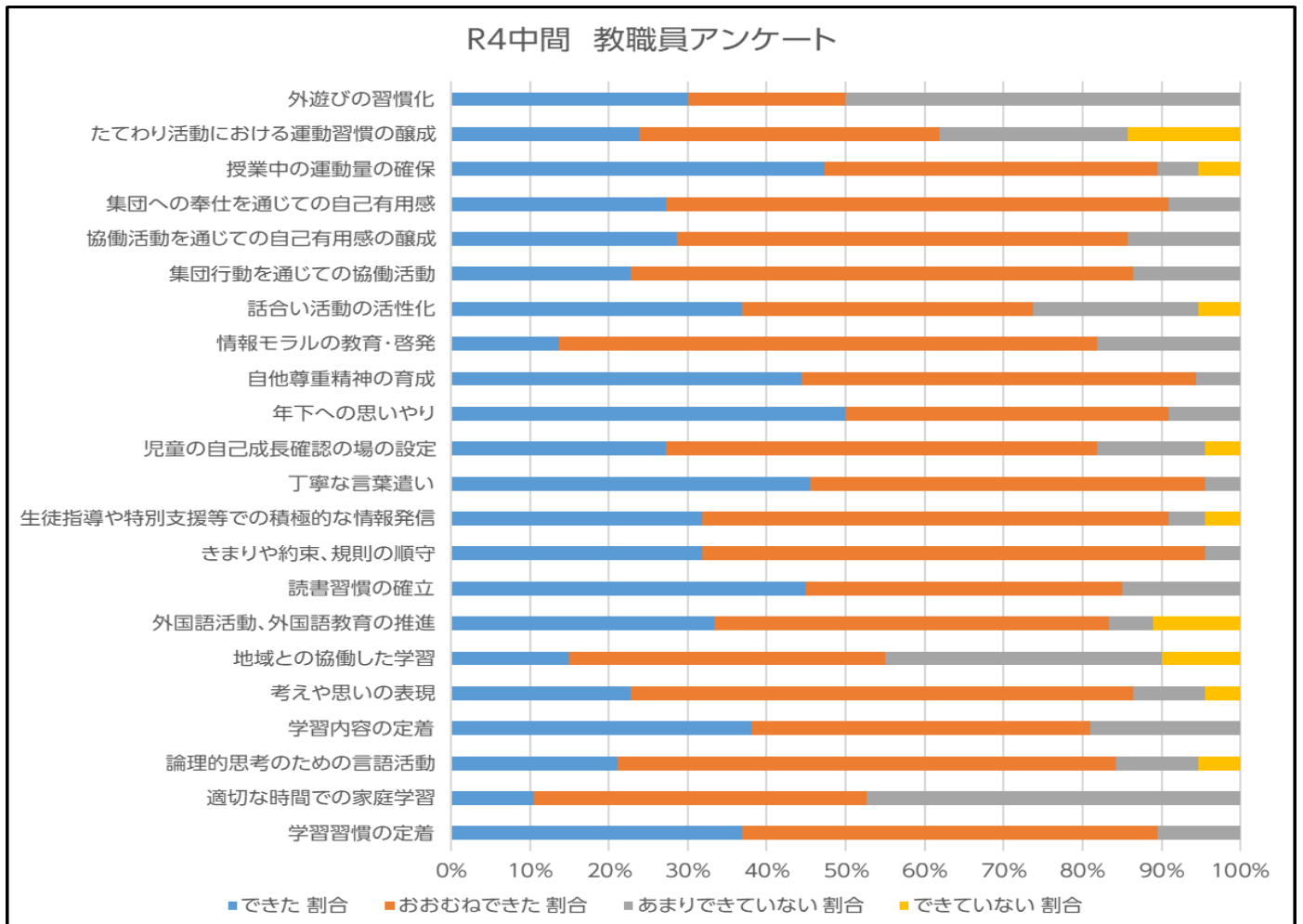
項目:「学習」「生活」「仲間・健康」の3項目



令和4年10月28日

生駒市立俵口小学校

分類	番号	全教職員	できた	おおむねできた	あまりできていない	できていない
		項目	割合	割合	割合	割合
学習	1-①	学習習慣の定着	37	53	11	0
	1-②	適切な時間での家庭学習	11	42	47	0
	1-③	論理的思考のための言語活動	21	63	11	5
	1-④	学習内容の定着	38	43	19	0
	1-⑤	考えや思いの表現	23	64	9	5
		地域との協働した学習	15	40	35	10
		外国語活動、外国語教育の推進	33	50	6	11
		読書習慣の確立	45	40	15	0
生活	2-①	きまりや約束、規則の順守	32	64	5	0
		生徒指導や特別支援等での積極的な情報発信	32	59	5	5
	2-②	丁寧な言葉遣い	45	50	5	0
		児童の自己成長確認の場の設定	27	55	14	5
	2-④	年下への思いやり	50	41	9	0
		自他尊重精神の育成	44	50	6	0
		情報モラルの教育・啓発	14	68	18	0
仲間・健康	3-①	話し合い活動の活性化	37	37	21	5
	3-③	集団行動を通じての協働活動	23	64	14	0
	3-④	協働活動を通じての自己有用感の醸成	29	57	14	0
	3-④	集団への奉仕を通じての自己有用感	27	64	9	0
	3-⑤	授業中の運動量の確保	47	42	5	5
	3-⑥	たてわり活動における運動習慣の醸成	24	38	24	14
	3-⑦	外遊びの習慣化	30	20	50	0



考察

・全体的に肯定的意見の割合が高く、前期の教育活動においてまんべんなく教育活動がなされていたと思われる。しかし、改善が必要とされる項目の「適切な時間での家庭学習」「外遊びの習慣化」については、昨年度の同時期と比べ、肯定的意見が15ポイント以上下降しており、注意が必要である。

・肯定的意見の割合が9割を超えている項目は、「きまりや約束、規則の順守」「生徒指導や特別支援等での積極的な情報発信」「丁寧な言葉遣い」「年下への思いやり」「自他尊重精神の育成」「集団への奉仕を通じての自己有用感」の6つであった。その中でも、「きまりや約束、規則の順守」「丁寧な言葉遣い」については肯定的意見の割合が95%であり、教員はこれらの項目が示す教育活動に高い達成感を感じていることがうかがえる。それ以外の項目についても、概ね肯定的意見の割合が8割を超えており、教員自身が目的意識をもって計画的に教育活動に取り組んでいるものと考えられる。

・否定的意見の割合が高かった項目は、「適切な時間での家庭学習」「地域との協働した学習」「たてわり活動における運動習慣の醸成」「外遊びの習慣化」の4つであった。「地域との協働した学習」については、今年度も否定的意見の割合が高い項目として挙がっているが、昨年度の同時期と比べると肯定的意見が30ポイント上昇している。今年度、1学期後半に新型コロナウイルス感染の第7波が到来し、地域人材をはじめとした外部人材を活用した教育活動が対面では展開しにくかったものの、オンラインを用いて

分類	番号	全教員	肯定意見	否定意見
		項目	割合	割合
学習	1-①	学習習慣の定着	89	11
	1-②	適切な時間での家庭学習	53	47
	1-③	論理的思考のための言語活動	84	16
	1-④	学習内容の定着	81	19
	1-⑤	考えや思いの表現	86	14
		地域との協働した学習	55	45
		外国語活動、外国語教育の推進	83	17
		読書習慣の確立	85	15
生活	2-①	きまりや約束、規則の順守	95	5
		生徒指導や特別支援等での積極的な情報発信	91	9
	2-②	丁寧な言葉遣い	95	5
		児童の自己成長確認の場の設定	82	18
	2-④	年下への思いやり	91	9
		自他尊重精神の育成	94	6
		情報モラルの教育・啓発	82	18
仲間・健康	3-①	話し合い活動の活性化	74	26
	3-③	集団行動を通じての協働活動	86	14
	3-④	協働活動を通じての自己有用感の醸成	86	14
	3-④	集団への奉仕を通じての自己有用感	91	9
	3-⑤	授業中の運動量の確保	89	11
	3-⑥	たてわり活動における運動習慣の醸成	62	38
	3-⑦	外遊びの習慣化	50	50

改善が必要な項目
改善が必要でない項目

肯定的意見80%以上
肯定的意見90%以上
否定的意見41%以上
否定的意見31%以上
否定的意見21~30%

教員の肯定意見の経年比較

分類	番号	全教員		
		項目	R4肯定意見%	R3否定意見%
学習	1-①	学習習慣の定着	89	95
	1-②	適切な時間での家庭学習	53	70
	1-③	論理的思考のための言語活動	84	81
	1-④	学習内容の定着	81	95
	1-⑤	考えや思いの表現	86	82
		地域との協働した学習	55	25
		外国語活動、外国語教育の推進	83	86
		読書習慣の確立	85	86
生活	2-①	きまりや約束、規則の順守	95	95
		生徒指導や特別支援等での積極的な情報発信	91	81
	2-②	丁寧な言葉遣い	95	86
		児童の自己成長確認の場の設定	82	91
	2-④	年下への思いやり	91	95
		自他尊重精神の育成	94	95
仲間・健康		情報モラルの教育・啓発	82	81
	3-①	話し合い活動の活性化	74	52
	3-③	集団行動を通じての協働活動	86	86
	3-④	協働活動を通じての自己有用感の醸成	86	91
	3-④	集団への奉仕を通じての自己有用感	91	91
	3-⑤	授業中の運動量の確保	89	85
	3-⑥	たてわり活動における運動習慣の醸成	62	59
3-⑦	外遊びの習慣化	50	71	

5～9ポイント上昇
10ポイント以上上昇
10ポイント以上下降
5～9ポイント下降

の出前授業の実施など実施形態を工夫したことが、結果の改善につながったと思われる。しかしながら、学年によっては未だ実施できていない学年もある。今後の教育活動において、計画的に実施していきたい。「たてわり活動における運動習慣の醸成」については、今年度は運動場で活動を行っていたにも関わらず低評価であった。たてわり活動の班活動は児童の自主的活動の意味合いが強く、教員が介入しにくいところがあることも原因の一つとして考えられる。しかし、今年度、新たに否定的意見の割合が高かった項目として挙げられた「外遊びの習慣化」が、昨年度の同時期と比べて 21 ポイント下降していることを合わせて考えると、後半の教育活動では教員

が意識して、児童に運動する楽しさを味わわせたり、運動する機会を設けて働きかけを行ったりする必要があると思われる。昨年度は否定的意見の割合が高い項目として挙げられていなかった「適切な時間での家庭学習」は、昨年度の同時期と比べて、肯定的意見が 17 ポイント下降している。昨年度は「あまりできていない」が 30%だったのに対し、今年度は 47%であり、昨年度「概ねできた」と評価していた教員が、今年度は「あまりできていない」と評価したものと思われる。昨年度の学校評価における本校の児童の学習状況を踏まえ、年度当初に各学年で家庭学習の具体的内容とそれを実施するのにかかる時間の目安を設定して取組を進めてきた。このように取組の具体化を進めたことが、抽象的評価から具体的評価へと転換され、肯定的意見の割合の減少につながったことと思われる。後半の教育活動においては、各学年で設定した家庭学習の具体的内容にかかる実施目安時間の見直しを図るとともに、着実にその実施がなされるよう、各々の教員が意識化する必要がある。「外遊びの習慣化」の肯定的意見の割合は、昨年度 71%だったが、今年度 50%と 21 ポイント下降している。調査の実施時期が、熱中症や新型コロナウイルス感染症について配慮が必要な時期だったことも低評価の一因であると思われる。長引くコロナ禍の影響による、子どもたちの体力低下が懸念されている。高評価である「授業中の運動量の確保」とともに、後半の教育活動では、休み時間に児童が進んで外遊びをするような取組の工夫を展開していきたい。

・児童と教員の評価を比較すると、全体的に教員の方が肯定的に評価している項目が多い。児童と教員の肯定意見の意識比較で、10ポイント以上の乖離が見られた項目は、「学習習慣の定着」「適切な時間での家庭学習」「考えや思いの表現」「丁寧な言葉遣い」「年下への思いやり」「集団への奉仕の意識」「たてわり活動における運動習慣の醸成」の7項目であり、10ポイントから23ポイントの乖離が見られる。そのうち「適切な時間での家庭学習」と「たてわり活動における運動習慣の醸成」の項目については、児童の方が教員よりも肯定的に評価している項目である。そ

分類	番号	項目	肯定意見 教員%	肯定意見 児童%
学習	1-①	学習習慣の定着	89	78
	1-②	適切な時間での家庭学習	53	64
	1-③	言語活動を用いた論理的思考の育成	84	79
	1-④	学習内容の定着	81	87
	1-⑤	考えや思いの表現	86	68
	1-⑥	落ち着いた学習態度		91
		地域との協働した学習	55	
		外国語活動、外国語教育の推進	83	
		読書習慣の確立	85	
生活	2-①	きまりや約束、規則の順守	95	89
		生徒指導や特別支援等での積極的な情報発信	91	
	2-②	丁寧な言葉遣い	95	81
		児童の自己成長確認の場の設定	82	
	2-③	他者との協力		84
	2-④	年下への思いやり	91	75
	2-⑤	正しい廊下歩行		81
	2-⑥	あいさつ習慣の確立		81
	2-⑦	清掃活動を通じての勤労		73
		自他尊重精神の育成	94	
	情報モラルの教育・啓発	82		
仲間・健康	3-①	建設的な意見の発言	74	65
	3-②	話し合い活動における協調性		77
	3-③	集団行動を通じての協働活動	86	81
	3-④	協働活動を通じての自己有用感の醸成	86	
	3-④	集団への奉仕の意識	91	80
	3-⑤	授業中の運動量の確保	89	90
	3-⑥	たてわり活動における運動習慣の醸成	62	85
3-⑦	外遊びの習慣化	50	59	

評価に10ポイント以上の乖離が見られる項目

評価に20ポイント以上の乖離が見られる項目

れ以外の5つの項目については、教員の方が児童よりも肯定的に評価しており、全体的に教員の方が肯定的に評価していることを考えると、前期の教育活動において、教員の達成感ほど児童は達成感を持っていないということが明らかになった。この結果を踏まえたうえで、後半の教育活動の改善を図っていかなければならないと考える。

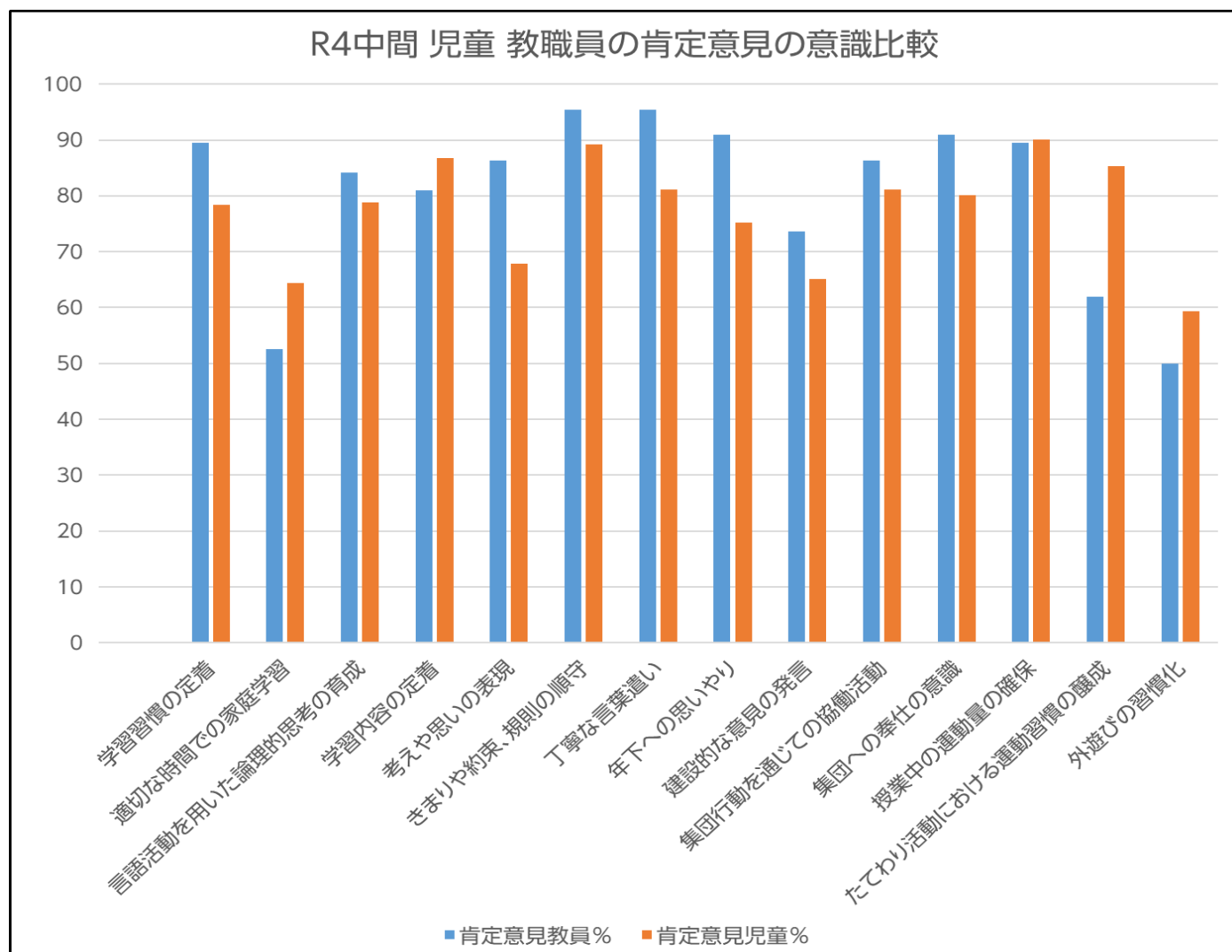
「学習習慣の定着」については、課題を出すだけでなく、提出を求めた課題についてきちんと提出がされているかを教員が把握し、必要に応じて指導をしたり、家庭に協力を求めたりすることで、改善を図る必要があると思われる。

「考えや思いの表現」については、児童の肯定評価は昨年度の同時期と比較して7ポイント上昇しているものの、教員の評価との間に18ポイントの差が見られ、後半の教育活動において改善を図るべき項目

といえる。児童の評価が好転している項目でもあるので、前半の教育活動において展開した活動を継続しつつ、なお一層の取組を行っていききたい。

「丁寧な言葉遣い」については、児童の評価と教員の評価の間に 14 ポイントの差が見られる。各々の昨年度の評価と比較してみると、児童は4ポイント下降し、教員は9ポイント上昇している。このことから、教員が思っているほど、児童は適切な言葉遣いできていないことが分かった。時と場に応じた丁寧な言葉遣いができるという事が、他者との良好なコミュニケーション形成に重要であるということを、改めて児童に伝えていかなければならないと考える。

「年下への思いやり」については、児童の評価と教員の評価の間に 16 ポイントの差が見られる。各々の昨年度の評価と比較してみると、児童は5ポイント上昇し、教員は4ポイント下降している。親切、思いやりについては、今年度、道徳の授業を中心に組織的かつ計画的に指導を行ってきたが、その成果が児童の評価の好転につながっていると思われる。未だに児童と教員の評価に乖離は見られるものの、年々、児童の評価が好転していることを考慮し、今後も前半の教育活動において展開した活動を継続していくことを中心に改善を図っていききたい。



「集団への奉仕の意識」については、児童の評価と教員の評価の間に11ポイントの差が見られる。各々の昨年度の評価と比較してみると、児童は3ポイント下降し、教員は変化がなかった。委員会の常時活動をしている児童を、教員はもちろんのこと下級生も認め、感謝や労いの言葉がけを学校全体で展開することで、高学年児童の自己有用感のさらなる獲得を目指していきたい。

R4中間 児童 教職員の肯定意見の意識比較

—●— 肯定意見教員% —●— 肯定意見児童%

